

◆ 2015年度地球研研究プロジェクト発表会の報告

プロジェクトサブリーダー・
古気候学グループ

佐野 雅規

(総合地球環境学研究所)

毎秋恒例の地球研全体の研究プロジェクト発表会が11月25～27日にコープイン京都で開催されました。現行プロジェクトの進捗状況を発表したのち、所内外の研究者から評価や批判を受けることで、個人やグループ、ひいてはプロジェクト全体が外部からどのように映っているかを窺い知れる有益な会合です。地球研では、気候適応史プロジェクトをふくむ八つの本研究と一つの子備研究が進められていますが、それらの発表だけでなく、新しく提案されているプロジェクトの採否にかかわる発表や、研究所としての将来の方針についても討論する時間が設けられています。内容の濃い凝縮された3日間でした。

地球研の研究プロジェクトの多くは、研究所が掲げる大きな目的、「環境問題の解決に資する研究」を真正面に据えて活動しています。たとえば、なんらかの問題を抱える地域に入り、住民の幸福を担保しながら環境の改善に役立つ技術やしぐみを現地の人びととともに考案・導入し、その成果を検証して改良をはかるような、地域に根ざした超学際的な研究を進めています。

いっぽう、われわれのプロジェクトは過去を対象としているので、いま起こっている環境問題にすぐに役立つ具体的な方法を提示することはできません。しかし、遠い過去に遡って人と気候の関係を丹念に読み解き整理することで、現在ばかり観察してはわからない知恵や教訓を歴史から引き出すことに注力しています。

ほかのプロジェクトとの親和性は現時点では低いのですが、プロジェクトの評価を高めるとともに、われわれが直面している課題に対して建設的なコメントを引き出すため、中塚プロジェクトリーダーがくふうを凝らして発表に臨み



会場からの質疑をもとに活発な議論が展開しました

ました。加えて、来年度以降の第III期中期計画では、ほかのプロジェクトとの協同による「新しい地球環境学の構築」といった壮大な目標を掲げるので、そこにむかう道筋を質疑のなかから探ろうとしているようでもありました。

本研究2年めの気候適応史プロジェクトでは、全グループの成果を吸収し、気候変動による社会応答の背後にある社会的要因を解析するために「分類・統合」グループを新たに設置しました。発表会では、このグループの設立の経緯や構想段階

の方法(概念モデル)を最初に時間をかけて説明し、プロジェクトの将来を展望した研究計画を示しました。次いで、本年度のおもな成果を事例別、グループ別に紹介したうえで、最後に分類・統合の鍵となる、免定や人口、米相場などの社会統計データの収集状況を説明し、次年度以降の取り組みについて言及しました。質疑では、年輪酸素同位体比による考古材の年代決定などのような専門外の方たちにもわかりやすい成果発信や、個別研究の着実な進展が評価されました。

いっぽうで、ほかのプロジェクトとの親和性が高い、分類・統合にかかわる概念モデルについては、中塚プロジェクトリーダーが認めているように未熟なこともあり、改善についての建設的なコメントがいくつか出されました。また、現在の知見をいかしてモデルを精緻化させる案や、地球温暖化など現代社会が抱える問題に対するティッピング・ポイントの提示の可能性についての質問もありました。

気候適応史を環境研究にどうつなげるかを常に意識しながら成果を収斂させる取り組みが必要なことを再認しました。その意味でも、分類・統合の活動が鍵となります。私たちの今後の研究活動を加速化させるうえでも、有意義な時間となりました。

北日本における樹木年輪酸素同位体比データの獲得状況と展望

古気候学グループ 箱崎 真隆
(国立歴史民俗博物館)



写真1 青森県下北半島太平洋沿岸にある猿ヶ森砂丘の埋没林

樹木年輪中のセルロースの酸素同位体比は、生育時の降水量・相対湿度によって規定されます。そのため、これを年輪気候学解析の説明変数として用いれば、過去の降水量・相対湿度の復元が可能となります。古気候学グループでは、日本列島の高分解能古気候復元を目的として、日本各地から木材試料を収集し、この年輪酸素同位体比の分析に取り組んでいます。すでに中部日本と南日本では、過去2,000年分のデータが得られており、両者の相違点を比較できる段階にきています。

しかし、残る北日本では、データの獲得が遅れています。北日本は、夏季にオホーツク海高気圧の影響を受け、とくに太平洋側の地域には湿潤冷涼な北東風「ヤマセ」が吹きつけることがあるため、ほかの地域とは異なる降水パターンが存在すると予想されます。ゆえに、この地域の降水量・相対湿度の復元のためには、北日本に生育した樹木を用いて、年輪酸素同位体比データを獲得する必要があります。本稿では、これまで遅れていた北日本におけるデータ獲得の状況と今後の展望について述べます。

北日本における中世のデータを初めて獲得

筆者は、これまでの研究で、青森県東通村猿ヶ森砂丘(太

平洋沿岸)下の泥炭層に埋没していたアスナロ材(写真1)の年輪年代学的研究を行ない、年輪幅の標準年輪曲線(以下AOSR)を構築しました。AOSRの暦年代は、青森県内3遺跡の標準年輪曲線との年輪年代解析により、西暦944~1604年と決定しています。このAOSRを構成する試料は、産地も年代も明らかであることから、北日本の中世の酸素同位体比データをえるうえで、最適な試料といえます。

そこで、AOSRを構成する試料のなかから、年代の重なりあう10試料を選び、延べ1,267年輪の酸素同位体比を分析しました。その結果、各試料のデータ間でひじょうに高い相関が認められ、年輪幅にもとづく試料間の相対的年代関係が矛盾なく再現されました。これらのデータを平均し、新たな酸素同位体比標準年輪曲線(西暦1050~1595年。以下AOSR-OI)を構築しました。AOSR-OIを中部日本産ヒノキの標準年輪曲線と比較したところ、西暦1050~1595年の区間のデータと高い相関が認められ、暦年代も矛盾なく再現されました。

以上から、データ獲得が遅れていた北日本において、初めて中世の年輪酸素同位体比データを確立することができました。今後、このデータは北日本の古気候復元に活用されるほか、中部日本・南日本との地域間比較に役だてられ、さらには北日本の中世から近世にかけての歴史学・考古学調査における年輪年代測定にも役だてられることになります。

また、本研究は、低湿地の温帯性針葉樹埋没林の酸素同位体比分析例として、福島大学の木村勝彦教授(古気候学グループ)が取り組まれた福井県三方低地のスギ埋没林に次ぐ国内2番目の研究例となります。このことは、酸素同位体比にもとづく年輪年代法が、日本の広範な地域、さまざまな樹種、さまざまな環境で生育した樹木に適用できることをあらためて証明したことを意味します。

今後、酸素同位体比年輪年代法は、文化財の年代決定だけでなく、自然埋没林の年代決定や古生態復元にも活用され、文書記録のない(または曖昧な)火山噴火や地震の発元年推定にも役だてられることが期待されます。

さらに古い時代のデータをえるために

次に、北日本の年輪酸素同位体比データを、さらに古い時代まで拡充する二つの展望について述べます。一つめの展望は、青森県青森市石江遺跡群新田(1)遺跡から出土したアスナロ材(写真2)を利用した古代~中世のデータ獲得計画です。これらの出土材を対象に、年輪幅にもとづく年輪年代



写真2 青森県青森市新田(1)遺跡から出土したアスナロ材

を調査し、29試料間の相対的年代関係を確定して、西暦680～1047年にわたる368年間の標準年輪曲線を構築しています。また、この標準年輪曲線に組み込むことができなかった試料の放射性炭素年代を測定し(14Cウィグルマッチング)、それらが西暦400～650年ごろの年輪をもつものであることも確認しています。

これらの試料をつかって酸素同位体比を分析すれば、北日本のデータはいっきに500年以上過去へと延長され、西暦400年ごろ～1595年の約1,200年間にわたるデータがえられます。猿ヶ森砂丘の埋没木の分析から、北日本樹木は中部日本産ヒノキの標準年輪曲線でも暦年代を決定できることが明らかとなったので、この試みが成功する可能性は高いと考えています。すでに試料は管理担当者から提供していただいております、現在、測定にむけて準備中です。

二つめの展望は、猿ヶ森砂丘の埋没木のなかで、標準年輪曲線に組み込めなかった試料を利用する計画です。猿ヶ森砂丘の埋没木には約2,500～500年前(BP)の幅広い年代のものがふくまれています。一例として、砂丘南部に位置する左京沼から産出した埋没木(写真3)は、約2,500～2,300年前(BP)のものであることが先行研究によって明らかにされています。

これらは、AOSRや周辺地域の標準年輪曲線と年代が重ならないため、年輪幅にもとづく年輪年代法では暦年代を確定することができませんでした。しかし、酸素同位体比データをえることで、離れた地域の標準年輪曲線とも年輪年代解析が可能となり、これらの暦年代が決まる可能性が高まります。年代決定に成功すれば、北日本における先史時代の年輪酸素同位体比データの獲得と延長の足がかりとなりますので、これらの分析もきわめて重要であり、新田(1)遺跡出土材とともに分析を準備している段階にあります。

気候変動はどのような社会変容をもたらすのか

筆者は今年9月に名古屋大学年代測定総合研究センターから国立歴史民俗博物館に異動し、共同研究プロジェクト「日本の原始・古代史像新構築のための研究統合による年代

歴史学の新展開—新領域開拓と研究発信—」に携わることになりました。日本列島では、紀元前10世紀ごろから、大陸からのヒト・モノ・文化の移入が急速に進みました。本プロジェクトでは、その背景にどのような気候変動が存在し、それが社会変容とどう結びつくのかを明らかにすることを目的としています。

そのために、これからは朝鮮半島の木質古文化財の酸素同位体比分析にも取り組み、そのデータを、これまで古気候学グループが獲得してきた日本のデータと比較して、相違点を明らかにしようと考えています。しかし、朝鮮半島の木質古文化財の情報はひじょうに少なく、幅広い時代の試料を収集することが、第一の課題となっています。朝鮮半島の木質古文化財に関する情報をおもちの方は、ぜひ筆者までご一報いただきたいです。

今年(2015年)、日本列島は数十年に一度といわれる記録的大雨に見舞われ、各地で氾濫・洪水の被害が相継ぎました。いっぽうで、朝鮮半島は数十年に一度といわれる記録的大干ばつに見舞われ、農業に深刻な被害が生じました。おそらく今年の年輪の酸素同位体比を測定すれば、日本と朝鮮半島ではまったく逆のピークが描かれるものと予想されます。グローバルな視点でみればおなじ地域にある日本と韓国のあいだにも、このような明瞭な気候的差異が生じうることに、気候システムの複雑さ、そしてそれを復元することのむずかしさが垣間見えます。1年単位の高分解能古気候復元を行なわなければ、今年起こったようなローカルな地域差を検出することはできないでしょう。

世界的に物流が整備された現代では、今年程度の地域差が生じてても社会に深刻な影響はありません。しかし、もしおなじことがそうではなかった時代に起こったとしたら、そしてそれが数年～数十年間続いていたとしたら、隣りある国や地域のパワーバランスが変化し、戦乱や人びとの大移動のきっかけになりかねなかったと想像できます。

今後、日本国内および周辺地域の年輪酸素同位体比データを獲得し、それを比較することで、そのようなローカルな気候変動を読み解き、それが人間社会になにをもたらしたかを明らかにしたいと考えています。

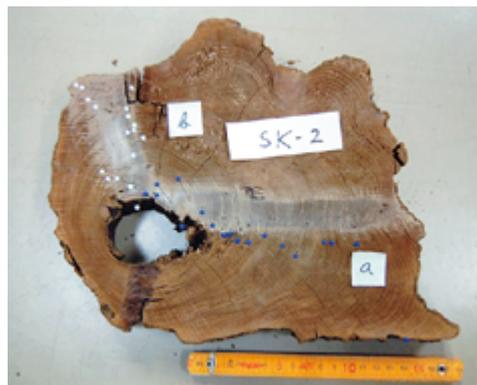


写真3 猿ヶ森砂丘南部の左京沼周辺からえられた埋没木



台風15号後の三島村黒島片泊地区のようす
(2015年10月6日)

◆ 島嶼地域における気候変動と地域社会



上: 台風15号により倒壊した恵比須神社
下: 倒壊した恵比須神社の周りから拾い
集められた棟札



近世史グループ 佐藤 宏之
(鹿児島大学)

鹿児島県は、南北600kmに広がる地域に有人離島28を有する日本有数の島嶼県です。島は狭隘性、脆弱性という特徴をもち、そこには独自の自然や文化、社会経済システムが存在しています。また、地球温暖化や経済のグローバル化など、さまざまな環境変動の影響を強く、しかも迅速に受ける地域でもあります。

その離島は、毎年のように集中豪雨や台風などの自然災害や、ときには火山の噴火に見舞われています。2015年5月29日、口永良部島新岳が噴火し、火砕流が発生しました。ただちに全島避難となり、いまだ島民の帰島はななっていない。同年8月24・25日には台風15号によって、三島村で全壊3、半壊16、一部損壊22の住家被害がありました*。

こうした自然災害だけでなく、島外への人口の流出や高齢化の進行などが深刻化しています。そのため、島の歴史や文化が流出・消滅の危機にあるといえます。そのことは、島の人びとが自然災害や火山噴火に対応し、そこから復興してきた過程、すなわち自然とともに生きてきた証拠(記録)が消滅することを意味します。したがって、さまざまな環境変動に対する影響を推察し、その適応策を提言する場所として、「島嶼」地域は最適といえるのではないのでしょうか。

飢饉における種子島島民の篤実な姿

こうした問題意識から、私は江戸時代の種子島における気候変動と藩や民間社会の社会的応答について検討しました。種子島家によって江戸時代から明治時代にかけて編纂された同家の歴代系譜、年譜である『種子島家譜』より、「風水害(雨乞い)、飢饉・疫病、地震・津波、噴火」および「社会的応答」に関する記事を抽出しました(寛永14年<1637>~明治24年<1891>、409件)。この史料は、同家の系図、歴代ごとの編年記事、それに文書、史料が挿入・記載されている点に特徴があり、現在、『鹿児島県史料 旧記雑録拾遺』の「家わけ4・8・9」(1993年・1999年・2001年)として翻刻されています。

江戸時代の種子島において、もっとも大きな自然災害と考えられるのは、文化元・2年(1804・1805)の飢饉です。それは台風とイナゴの大発生が原因であり、「七拾年来無之大凶作」、「無類之災殃」、「誠二絶言語候災殃」、「往古より無之事」と評され、「春より秋に至るまで、他國より籾(米を買入れ)して土庶人之飢を救うこと凡そ千百二十二石余なり、

且つ家老・醫者を村里に巡察せしめ、飢えを救い病を治すと雖も、死者殆ど千人なり」(文化2年)という状況でした。

島民は馬毛島に渡って蘇鉄を取り、それを水に浸して食べ、数百人(数千人)が飢えをしのいだといひます。当時、蘇鉄は「第一之宝」であり、洪水や早魃にもかかわらず、草取りなどの手入れも不要で、植えつけてさえおけばみずから成長し、飢えをしのぐにはこれより勝るものはないと認識されていました。よって、空き地があれば蘇鉄を植えることが重要であり、蘇鉄がある土地は高値で売買されていたようです(「大島林家遺言記録」)。

この飢饉にさいし、被災地の一つの住吉村の人びとは藩庫の空乏を思い、草の根を食べ、藩に救いを請いませんでした。その篤実な姿に対して、鹿児島島の商人原田十次郎は米100石を、柳田龍助は救い米の足しにと錢100貫文を与え、榎本甚兵衛は自分の船を売り渡し、その代錢で米550石、味噌2,500斤、醤油粕500斤を買い与え、藩はその「心入奇特之者」ぶりを賞しました。

主体的に自然と生きる島民から学ぶ

種子島は「地方(陸地)とハ相替り」、「端島(列島の一番はしにある島)」ゆえに、種子籾の「調達之主便無之」、山野稼の「外二稼方等之動キ一切無之」、「格別之産物屯茂無御座」、「銀錢之通融不自由之場所」と認識されており、そこに島嶼地域の特徴がみられます。そこで藩は島中に養蚕を薦め、それによって島民は多くの利益をえました。

ところが、その蚕が甘藷の葉や苗を食い、島中が飢饉となってしまうのです。島民はただちに蚕を駆除するために祈禱を行ない、養蚕をやめることを願い出ています。その代わりに、山野の手広な場所に、黍を植えつけ、砂糖をつくることを願い出ており、それが藩の利益になると述べています。民間の力による救済や、島民自らが台風や早魃に差し支えない作物である黍を植えることを主体的に選び取るという、民間の対応力が注目されます。

『種子島家譜』は、これまででも研究につかわれてきた史料です。あらためて読み返してみると、そこに島の人びとが自然災害や火山噴火に対応し、そこから復興してきた過程、すなわち自然とともに生きてきた証拠が数多く記録されていることがわかりました。こうした歴史資料を用いて、地域住民の災害対応力や災害からの復元力・復興力を歴史学的に解明することは、島がもつ独自の文化を見直す契機となるのではないかと考えています。

* 鹿児島県危機管理局危機管理防災課「台風第15号による被害状況」平成27年9月11日15:00現在(鹿児島県庁ホームページより)

◆ 東アジア環境史学会に参加しました

プロジェクトリーダー 中塚 武
(総合地球環境学研究所)

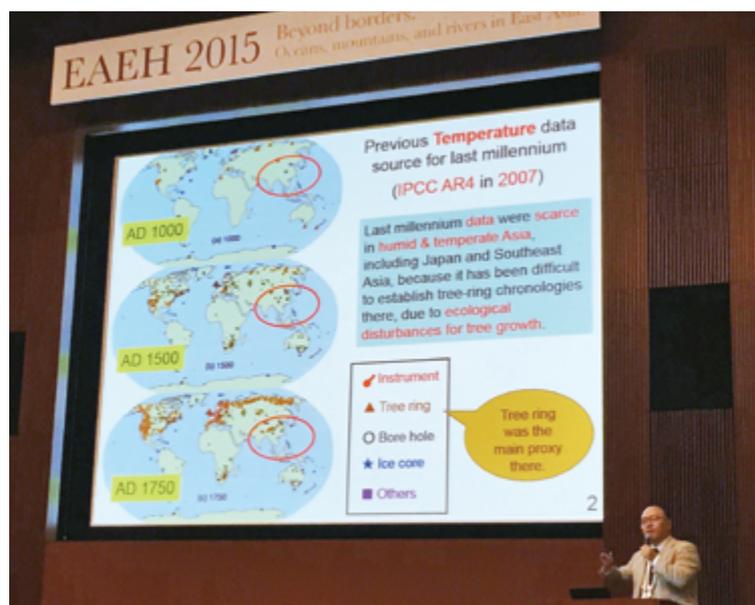
東アジア環境史学会 (EAEH) の第3回大会が、2015年10月22-25日に高松の国際会議場と香川大学において開催されました。同学会は2009年の世界環境史会議の際に設立され、大会は基本的に2年に一度開催され、次回は中国の天津で開かれます。「東アジアの環境史を研究する世界の研究者」を組織した学会なので、発表と質疑はすべて英語で行なわれます。日本人の日本史研究者の英語力を反映してか、参加者の大半が外国人でした。

20か国から250名以上の研究者が参加し、61のセッションで200件ちかくの研究発表がありました。文系学会の通例として、各セッションには司会者とともに討論者が設定され、要旨だけでなく講演内容の詳細も事前に関係者全員に周知されており、理系の研究者である私には戸惑うことも多くありましたが、どのセッションでもおおむね活発に討論が行なわれていました。

気候適応史プロジェクトからは、筆者と地球研に在籍するすべての研究員が参加しました。地球研外のプロジェクトメンバーも数名が参加し、さまざまなセッションで講演者、司会者および討論者として、大活躍されていました。

初日の全体セッションでは、私がアジアと世界における古気候復元の近年の発展をレビューするとともに、3日目にはプロジェクト独自のラウンドテーブルセッションを開催し、プロジェクトの全体構想および各グループのおもな研究成果について、研究員と分担して紹介しました。このセッションには、競合するパラレルセッションが数多くあるなかで、初日のレビューを聞いて興味をもった十数名の研究者(わずかな日本人以外は、ほぼ全員が外国人)が集まりました。「気候の変動に対する社会の応答を時代と地域を超えて文理融合の視点から包括的に比較研究する」本プロジェクトの構想と成果は、参加者にとっても好評に受けとめられました。

学会参加の個人的な感想を踏まえて、本プロジェクトとしての課題を述べるならば、次の三つがあげられます。①環境史の研究に



全体セッションで発表する筆者

は、歴史地理や経済史、農業土木、生態学、疫病研究などのさまざまな潮流があつて、世界的に活発な研究が行なわれており、プロジェクトとしても海外に学ぶべき点が多いこと。②学会でのプレゼンの水準はまさに玉石混淆であり、語学の問題さえクリアすれば、プロジェクトにおける各メンバーの研究成果は、すべて国際的に高く評価されるべきものであること。③気候適応史プロジェクトの全体構想は、世界の環境史研究のなかでもきわめて先進的・野心的であり、今後ますます国際的な発信(国際学術誌へのおもな論文の投稿、国際学会での発表、国際ワークショップの主催など)をしていく必要があること。私としては、総じてたいへん有意義な学会参加でした。

この学会で、もう一つひじょうに深い感銘を受けたのは、2日目のエクスカージョンでの瀬戸内海の離島・豊島^{てしま}への訪問です。産廃不法投棄の島として知られるこの島には、全国ネットの報道ではうかがうことのできない、地域住民の苦闘の歴史がありました。地域リーダーの一人が冷静に分析されるその長大な経験は、まさに環境史そのものであり、時代と地域を超えた研究の基点の一つになるものと感じられました。



バイリンガルの外国人参加者の助けを借りて、日本語・英語の両方で議論が交わされました



ラウンドテーブルセッションのようす



岐阜県高山市にてスキーを学ぶ(2012年2月)

During the last five years, I have unforgettable experiences in Japan. I got the PhD degree in Nagoya University, and my first baby was born in Nagoya, which is the happiest thing in my life. After I returned to China, I still remember five unforgettable years in Japan.

For most of visitors, Japan is a beautiful and clean country. During the last five years, I have visited many beautiful places, such as Ise Jingu, and several old castles (Matsumoto-jo, Inuyama-jo, Okazaki-jo, Nagoya-jo and Takamatsu-jo) in Japan. My family had the wonderful time in Okinawa and Disneyland in Tokyo. In particular, temples and shrines in Nara and Kyoto are really impressive for me. Because these temples and shrines make me keep a peace mind when I stay there. So working in Kyoto is really good for me. Usually, I visited temples and shrines every weekends, for the Kinkaku-ji, Kiyomizu-dera and some temples near Arashiyama. I have been there many times, which were the happy time.

For me, the greatest gain during the last five years is the attitude of preciseness and strictness. I learned preciseness and strictness attitude to work from people in the lab/school. For everything in the work, people pay considerable attention on that and do the work very carefully even for the tiny things. I learned such kind of attitude to the work, which should be very helpful for my career. When my baby grow up, I think I would teach him how to deal with the things with the attitude of preciseness and strictness.

During the last five years in Japan, I got impressions for Japanese.

◆ Five unforgettable years in Japan

日本ですごした忘れえぬ5年間

古気候学グループ Xu Chenxi / 許晨曦
(中国科学院地質与地球物理研究所)

1 Most of Japanese are well educated.

During my stay in Japan, I did not see an example of someone spitting. Public places is no hustle and not noisy, even people in the subway station, in addition to entering and exiting the train noise

caused, all the waiting people will consciously stood quietly waiting on both sides of the door. Passengers get on the subway, read pocket book. While riding the elevator, all of them are standing on the left side, no one chat and stand side by side. I noticed that the few people take things like walking in the street, rarely answer the phone on the street and more rarely answer the phone by loud noises.

2 The Japanese city streets are clean.

I like to walk around the streets or neighborhoods in order to understand the real situation of the city. Indeed, the Japanese housing is small, there is less compound. Even so, the Japanese will put their own living environment, the surrounding environment to create like a small neighborhood park. Even if it is only 0.1 square meters of open land, they will be planted on the beautiful flowers. For the neighborhood, I did not see the dirt out of the trash, did not see the ground with abandoned plastic bags, paper, and did not see there is a smell of urine in the toilet. All shops are bright and clean.

3 The Japanese city traffic orderly.

Before I came to Japan, I imagine that traffic in Japan will be busy and crowded. But here are not many people on the road, number of cars is not a lot, even in the evening peak. But I can not hear the car horn sounds. Whenever red light is on, cars would stop consciously and wait for walker. People walking on the sidewalk did not feel unsafe. It is very interesting that many Japanese ride the bicycles while not many Chinese used

the bicycles although China is called as kingdom of bicycle.

4 The Japanese are frugal.

Restaurants use of disposable chopsticks are short. Dinner guests usually eat all food, and waste of food is really rare in Japan. These aspects of savings, seemingly insignificant, but it saves many resources based on the large population. Everywhere I go, there is not seen that a water pipe or a leaky faucet is leaking.

In total, Japan is an easy place for me. Even I cannot understand Japanese, I and my family have the wonderful time in Japan. In future, I want to visit Japan again. During the last five years, there are dozens of people that have helped me a lot. I would like to express my deep gratitude for their kind support. I would like to acknowledge Prof. Takeshi Nakatsuka for accepting me as a PhD student in Nagoya University, making my PhD study possible and hiring me in The Research Institute for Humanity and Nature. He taught me all the things on how to do experiments and handle the mass spectrometer, which are essential part for not only my PhD study but also for my future study. Due to his rich knowledge, I learned many things on isotopes from him. His diligence and serious attitude on sciences set an excellent example for me. Besides, he always supports me to learn more (attending international conferences visiting other labs) and to realize my own idea (field-work in China). Thank you very much for your encouragement, support and guidance during the last five years.

愛知県岡崎市で楽しんだお花見(2011年4月)





どうして研究者をめざすことになったのか

中世史グループ 伊藤 啓介 (総合地球環境学研究所)



博士後期課程のころ

新コーナーのトップバッターは、プロジェクトリーダーである中塚教授の予定でしたが、諸事情により私が務めることになりました。はなはだしく力不足ではありますが、なにとぞご海容のほどをお願い申し上げます。

私は経済学部を卒業後、都市銀行で数年をすごしたあと、一念発起して文学部に3回生から編入した変わり種です。勇んで大学に通い始めたのはいいものの、崩し字の読み方をはじめ、1通の古文書を読みこなすために必要な知識の多さや実証の厳密性、それらに裏打ちされた先行研究の厚みに圧倒されそうになりました。

そんな私にとって幸運だったのは、当時の日本史学会で貨幣史研究が盛りあがっていたことでした。量産されていた論文を元銀行員の眼で読んでみると、貨幣政策を語るときに当時の財政について目配りがなされていなかったり、貨幣経済や金融についての感覚がないために、的の外れた視角がまかり通っているようにみえました。「これは私がつける隙があるのではないか」と思えたのです。お金を扱う銀行員をやめたのに、そのころにえた知識が役にたったのですから、わからないものです。

このことは、日本史学のある一面を私に教えてくれまし

た。E・H・カーの『歴史とは何か』の一節に「歴史学は現在と過去のあいだの尽きることを知らぬ対話である」という言葉があります。これ自体は高校生のころから知っていましたが、いまひとつ意味がわかっていませんでした。ですが、元銀行員である私が投げかけた疑問に対して、日本史プロパーの貨幣史研究者たちへの答えとはちがう答えを史料が返してくれたこのとき、多少なりとわかった気がしたのです。まだ何者でもなかった私でも、他のだれともちがう視点をもっていれば、日本史という学問に対して、ほんの少しでも貢献できる可能性がある。この思い込みが、私を研究者の道に本格的に進ませたといえるでしょう。

このことは同時に、私がどのような研究をすべきなのかも教えてくれました。現在に生きる人間である私が過去の人間の記した史料と対話することで、自分自身を理解することにもつながったのです。日本史を学ぶ最大の魅力は、過去の社会とそこに生きた人びとを知ることを通じて、現代の社会、ひいては現代に生きる自分を知ることができることなのだと思います。

*今号からスタートした新企画「あのことろ」は、プロジェクトメンバーのみなさんが「研究の道を究めようと思った「あのことろ」を回想し、その動機やエピソードを語っていただくコーナーです。



Pickup

プロジェクトのオリジナル・キャラクターが誕生しました!

年輪研究で、いつもノリノリな樹木の妖精が誕生しました! 安定感抜群のスギさん、白い木目が魅力のヒノキちゃん、考古木材ならではのコナラばあ、これからに期待

のケヤンキー(ケヤキ)の4匹です。ニュースレターやホームページ、イベントの場などを活用して、木材の特徴や測定方法を紹介します。

年輪から昔の気候がわかるよ!

年輪の妖精

ネノリンジャー



スギさん

ヒノキとともに、日本の年輪研究にもっとも貢献している年輪界のスター! 私の埋没木を使って、より昔のデータを取得しているところなんだよ

色白で木目が細かい、年輪界の自称アイドルよ。年輪の切り分けが大変みただけで、良い香りで皆をリラックスさせているわ

コナラばあ



導管が列状にならぶ環孔材じゃけん、ブツブツになっとるんじゃ。杭や矢板として大量に発掘されとるが、劣化が激しい取扱注意なおばあさんじゃ



ヒノキちゃん

神社や寺で巨木となって生えていることが多い俺。建築材にも使われているけど、考古材としてはあまり登場しないだぜヨロシク!

ケヤンキー



● 今後の予定 ●

● 2016年1月10日(日)～11日(月)…………… 全体会議

● 第7回地球研東京セミナー「人が空を見上げるとき —— 文化としての自然」●

- 2016年1月29日(金) 有楽町朝日ホール
- 地球研では、研究成果を多くの方に発信するため、東京にて年に1回、一般の方を対象としたセミナーを開催しています。今回は、天体・気候・気象と人とのかかわりをテーマに、人間の歴史や文化を自然との関係からふりかえることを目的に講演をします。気候適応史プロジェクトからは、鎌谷かおるプロジェクト研究員が「空を読む人々——江戸時代の日記に見る『空』へのまなざし」と題して発表します。
- 事前申込制、参加無料(定員500名)
- セミナーのくわしい内容やプログラムは地球研ホームページをご覧ください。
- <http://www.chikyu.ac.jp/>



● 研究室通信 ●

◎ 2015年12月1日よりプロジェクト研究推進支援員として山田協太さんが加わりました。これまでの幅広い経験を活かした研究推進業務の取り組みが期待されます。(皇甫)



◎ プロジェクト研究員の許晨曦 (XuChenxi) さんが中国科学院地質与地球物理研究所の准教授にご着任のため、11月30日付で地球研を退職されました。あの頼もしい笑顔を毎日見られないのは寂しいですが、プロジェクトメンバーとして今後もかかわっていただきますので、よろしくお願いいたします。(皇甫)



◎ 地球研の研究プロジェクト発表会最終日(11月27日)に、毎年恒例の「地球研写真コンテスト」結果発表がありました。気候適応史プロジェクトからは、許晨曦さんと皇甫の作品がノミネートされました。惜しくも受賞は逃しましたが、佐野プロジェクト上級研究員と鎌谷プロジェクト研究員が被写体となった作品が特別に紹介されました。(皇甫)



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
 総合地球環境学研究所 研究室2(中塚研究室)
 『Newsletter』 No.7

発行日 2015年12月10日
 発行所 総合地球環境学研究所 研究室2
 〒603-8047
 京都府京都市北区上賀茂本山457番地4
 電話 075-707-2306
 URL <http://www.chikyu.ac.jp/nenrin/>

編集 総合地球環境学研究所 研究室2
 鎌谷かおる 皇甫さやか

制作協力 京都通信社